

て、
と述べて、
にほきまれて

—— 民族主義について ——

Ⅲ アナキズムの立場と視点

（一）
の人間や、全人類や、万民
の人間や、
をあげて論議する。ところが、同じ現実にはローランドやヘンリヤでは、更に深い側面を露
現われている。それらの諸々では全人類も労働者階級も民族も一齊に、今や創世に人類の運
命あることを示したフシに對して「ソ連と對して行け」と呼び、嵐みどろな行動をやっている。
だがこの現実に向して、我々はこれを分類的に取らぬといふはかむらして押し通すわけ
はなにもない。又、直線的に身体をわねたりつめふかす、目的論的試みはるほどで學術的
試みといふのは誤謬。我々が一箇のソボコギの相違を指摘して、直線的な態度である
と主張し、彼等が同じ人間階級を置らんとしているが、我々は、ボリシェビキやツァーリ

糞蠅と送り浪にはさまれて

——民族主義について——

(一)

誰でもメシの上の蠅を追わない人はない。従って、砂川で地元の人達や、全学連や、労組の人達が「アメ公出て行け」、「軍事基地反対」を執拗にやったことに対して、吾々は両手をあげて賛成する。ところが、同じ現実にはポーランドやハンガリアでは、更に深い別な形で現われている。それらの国々では全学連も労働者諸君も民衆も一斉に、今や露骨に人民の敵であることを示したソ連に対して「ソ連よ出て行け」と叫び、血みどろな争闘をやっている。この二つの現実に面して、吾々はこれを分離的に取り扱い、はほかむりして押し通すわけにも行くまい。又、重盛的に身体きわまったり、ハムレット的懷疑にふけるほど文学的たりえまい。というのは現在、吾々が一切のイデオロギーの相違を無視して、糞蠅的存在であるアメ公おっぱり出しに協同戦線を張らんとしているボル共は、ポーランドやハンガリアでは完

全に送り狼の本性をあらわしているからだ。即ち、吾々は現在、糞蠅と送り狼の間にはさまれているというのが真正銘の現実らしい。そして、先ず目的にうるさいメシの上の糞蠅をおっぱらうために、送り狼とお手々をつないでいかなければならないという、奇妙奇天烈な現実には直面しているのだが、考えて見れば、いまいましい限りである。

それにしても吾々アナキストは何時でも、かくの如く強権主義者共と妥協の線を打ち出すことばかりやって来たであろうか。歴史は決して、そうでないことを実証している。一八五五年、わがピエル・ブルードンは、敵を前にして協同戦線からの離脱が、敗北をもち来たすかも知れないような一（現在、日本のアナキストが置かれているよりも更に）一つらしい現実には直面した時、彼はその有名なロシア人の友ヘルツェンに断平として「ヨーロッパの民主主義がそれらの指導者達を指導者として認め、又我慢していることが、正しいか正しくないかは別として、かれらの偽善とマキャベリズムに、君は悲しまされ、腹を立てさせられたことはないのか。君は敵を前にして分裂するなど私にいうだろうが、親愛なるヘルツェンよ、自由にとつて、もっと怖しいのは、分裂が裏切りか、一体全体どちらなんだ」と書き送っている。そして「自由にとつて」真に怖しいことが、その後の歴史、殊にロシア革命においてどのように示されたかは諸君の知る通りである。日本においても大杉の善意に充ちた公然たるボル共との協同戦線が、如何に奴らの「ゴマのハイ」的裏切り行為によってけがされたかについても、吾々はよく知るところである。

かくの如き諸事実や、現実が明白に物語っているように、吾々は何時、彼らによって裏切られるかもしれない平和の一線を必死に守るために、同じ戦線につかなければならないが、以上のことはあくまでもキモに銘じておかなければなるまい。

(二)

吾々が東京で大会をやっていた当時には、砂川問題が最も大きくクロースアップされていたが、今や東欧でのソ連追いつきの争闘が大きなテーマとなって来た。かくて日本における民主戦線統一の線は、或は方向を変えて、新しい民族主義の喚起を通して、ヤンキー追いつきの幕が開かれるのではないか、というようなキザシものは見える。若し、そうなった場合、吾々は民主主義に対する理解と批判で示したような深さを、民族主義に対しても、同じように示し得るであろうか。

当地協の同伴者の中にも、ブルジョア歴史家の見解と同じく、民族主義的なものを、頑固なシヨウビニズムと伝統を固守する徹底的な侵略主義者の集りだと理解している人もある。

これはある点あやまりを含んでいる。たとえば前近代の単一民族を例にとって見ても、確かにシヨウビニズムと伝統固守の傾向は見られるが、自ら好んで侵略主義者だったことはほとんどなかった、と云っても過言でない。そして彼らを侵略にかり立てた要因も、民族的

要因からではなくて、地理学的な一厳密には氣象学的な変化のために、彼らの生活環境が破壊されかけた場合か、或は彼らの神が他の民族から冒瀆された場合に限るようだ。又、かかる要因で初まった侵略行為の傍若無人さや豹悍さも、歴史家自身の英雄主義やロマンチズムのために、多くの誇張や牽強附会がなされていることはいなめないものであって、平素は、どの単一民族も政治的には自治主義的に、軍事的には防禦主義的であったことはまぎれもない事実であるようだ。

これらの前近代的な民族主義と近代の民族主義とは、侵略主義的な点において全く異っているような外観を呈しているが、本質は同じである。前近代的民族の侵略の要因が、民族的なものでなく氣象学的な或は宗教的なものであったように、近代においても、近代民族主義の民族的要因が侵略主義的であるのではなくて、その経済的要因があえて侵略を進めしめたのであった。この経済的要因がマックス・ウェバーの所謂ピューリタニズムを、その道德的支柱として、資本主義的征服或は侵略を敢行せしめたことは有名である。ヒットラーの侵略主義も、生物学のイロハを知っている者にとっては、全く滑稽極まる血の純潔というようなあいまい限りもない観念をもって、この経済的要因と置き換えんとしたものであったに過ぎない。

なお、前述の種々な要因と、かつて前近代時代においては可成りに現実性を持っていたかも知れない血の純潔などの民族的要因との因果関係が持つ一弁証法的性質について述べな

ければならないのだが、紙数都合上省略して、ここでは生理と心理のけじめすら分らないような領域から取り出された血の純潔なる観念は、若しあったにしても、ファシストの哲学者達によってこじつけられたような侵略主義的性質のものではなく、全一的な一つと他との同体感を鼓舞する連帶的な情緒であったと解さなければならぬことを、強調するだけに止めて置きたい。

違犯の質的变化

早稲田の学生が「牝狼の夜」とかいいう秘密出版と犯罪者同盟をつくったというのでジャナリズムが騒いだ。週刊紙の報告によれば、「学生達はアナーキストだ。資本主義社会では金で凡てのモラルが決定されるが、金とか私有がなくなれば一切のモラルのあり様も変わる。それを先取しようというのだ」と説く者もあるという。ここまでは先づ文句はないとしてもその次がおかしい。「具体的には殺人、強姦、放火です。放火では選挙の時、投票場を焼打ちしよう企てたけれど、それはゴミ箱に火をつけるのとは違って、投票用紙をうまく焼いてしまわなくちゃならないのでむずかしい」ので止めたとかいう。また早稲田の猿知恵先生某も「アナキズムっていうのは古いですね」などといっている。

犯罪者同盟のMは本を万引して捕まると、あっさりサツにベラベラしゃべくっているが、相棒のお嬢さんの方は「スリルを味わいたかったわ」といって、「サドの愛人としてふさわしい態度」と折紙をつけられているが、この折紙は怪しいものだ。

というのは、サド以前には違犯が、生理と心理の極めてけじめの付けにくい領域で、どのような反射作用を起こすかをガッチリと把んだ者はいなかった。違犯は不規則の兄弟分なのだが、例えば、裸体は医者診察室や裸体主義者のキャンプでは常態で規則的だが、ベッドでは逆だ。なお、一そう恐怖の入りまじった鞭で打たれた血のにじむ裸体は不規則な裸体だ。それは烈しく情緒をゆさぶる。違犯は勃起と射精をとまなう。これがサドのメカニズムだ。

ばくは前述のお嬢さんが、スリルを感じたかっただけで射精しましたといわなかったにも拘わらず、それを賞めたことを怪しいというのではない。彼女はダイビングの選手よろしく、軽いスリルを感じながら万引きを全くスポーツのように安々とこなしている。同様に学生M君も安易にいらぬことまでしゃべる。そこには不規則が産む恐怖がまじっていない。違犯意識は極めて稀薄だ。だからS等がいうように、モラル先取競技の選手達なのだ。これはなにも不思議はない。古代ギリシャには甘美を競うキッスの競技すらあったんだから。しかし、サドの時代には、人々は、静かだが型にはまったモラルのせまい世界であっていた。そこでは違犯は稀少価値だった。

近代になって大工業生産機構が凡てをスピードアップするや否や、違犯は大衆化する。同時にそれは質的变化を起こし始めた。プチブル的自由の量の拡充が続いて起る。オートバイで暴走してすら軽い性的興奮が生誕する。

このように、違犯と禁止の相互関係の鎖の漸次的な遅緩の中でのみ、文化革命は大河の流れ

れの如く除々に、大衆それ自身のものとなる。前述の学生達はその半意識的なその一員に過ぎない。これに反して投票場を焼くことは、荒れ狂う怒涛の中の出来事である。それは社会革命の次元に所属する。日本の現実では、これら二つの同時性把握はまだ非大衆的である。だから学生達が投票場を焼き払うことを止めたのは、8らがいうように「むずかしいから」止めたのではない。それはあれかこれかの選択をせまる決意を要する次元に属し、気軽に出来るスポーツ的な遊びではないから止めたのだ。この遊びの意味は重要である。

ある賢人がいうように、前世記の、労働が並ぶもの無しと考えた終局目的の達成というところよりも、自己の力の行使を魅力に富み、価値あるものとする「生」は、その労作にスポーツ同様の快活な大ざっぱな幾分皮肉な肌合を与えている。人々は詩をジャズを歌いながら足で書くに至る。真に価値ある仕事とは、「かかる不経済な遊びに似て非利己的な関心から生ずる思いがけない贈物のようにしてのみ達成される。科学上、芸術上、又は物理学的方法則のようなものですら、発見しようとして発見された例はかつて歴史上なかった」ことは注意を要する。

文化革命の一使徒たるこの学生達は、十九世紀的な汗の臭の粉々たる労働第一主義の思想とは割然と訣別しているばかりか、違犯の質的变化を肉体でもって感じとっているが、彼らは唯だ、時間の中をヨチヨチと泳ぎ回っているのみだ。決して永遠の反逆者ではなく、従ってアナキストでもあるまい。

(一九六四)

最近におけるソ連農業の変異について

ルイセンコーの「春化处理」流行とからみ合せて

ソ連のルイセンコーがメンデルの遺伝説に反対して、後天的に与えられた性質や環境からうけた影響も、その子孫に遺伝させることが出来ると豪語して以来、彼の学説の実験的基礎になった一秋蒔き小麦を二度から三度の低温に四十時間つけておいて、これを春に蒔くと立派にみのるという、例のヤロビザ（春化处理）がヤロビ農法という名前前で非常な勢で日本の寒村に流行している。日本のラジオなどでも連続講演をやったと云うことだから、おそらく諸君は御存知であろう。

このヤロビ農法が初めて日本の農村へ根を下したのは、昭和二十六年春のことで、所は長野県飯田市附近の松尾村だということだ。当時この村へ入開していたKという共産党員が、ルイセンコーやミチューリン学説の支持者で、折からはじまった農地委員の選挙に立候補した

彼は、これらの学説の宣伝をその選挙に利用した。

「これが契機となって、昔から農民斗争の盛んであった伊那谷の村々へ、このヤロビ農法は拡まって行った。その年の九月に下伊那郷の村々の有志が麦を持ちよって、K村の食糧協同組合の冷蔵庫を借りて、最初の秋蒔きヤロビ処理が日本で行われた。」十月には「下伊那ミチューリン会」が結成され、その翌日のヤロビ麦蒔きつけ前には、ガリ版の「伊那の農業第一号三百部が刷られた。」

この最初の成績の結果は失敗と成功あい半ばしたというのだが、成功の方のうわさは多くの村々へ反響した。かくして、北信の村上村や北九州でも、この一粒の麦の芽は出はじめた。伊那のヤロビの芽はこれを発端として、今や全国的な運動にまで発展しようとしている。今年二月二十日東京神田の教育会館で、三日間にわたる日本ミチューリン会結成大会が開かれた。集まった農民、技術者、計三百九十九名が三百人余りの傍聴者を交えて討論を行ったといわれている。

さて、僕はこの会での討論内容は知らない。ルイセンコやミチューリンの学説がメンデル説を打ち破って、世界の学界の承認をうるかどうかは、今後まだまだ多くの時を要することであろうが、目先的にはこの農法を採用した結果、将来どのようなマイナスが起るかどうかは別として日本の貧しい農民諸君に一割乃至二割程度の麦その他の増収を得せしめている事実は認めざるを得ない。

従ってソ連で、彼らの学説の宣伝のために動員されている、無数の人員や豊富な技術や、そのおびただしい金に糸目をつけない費用のことを考えるとき、吾々は当然以下のような判断をしても良い筈である。不完全で貧弱で極めて少数の日本農民諸君のやっている「春化処理」とは違って、ソ連ではそれは完璧にソ連全農業に実践されているために、日本の農民諸君がやっているのとは格段に上々な収穫を上げているに違いないと考えて良いことである。故に当然の推定として、彼らの学説が流布され初めて後の食糧五ヶ年計画に於て、ソ連のホルホーズ農業は、曾て世界の歴史になかったほどの素晴らしい発展と増収とを得ていなければならない筈である。

吾々はこの推定を最近のソ連農業及び農業政策の結果と比較して見る必要がある。

スターリン死後マレンコフは、今まで黒パンばかりを食っていたソ連一般民衆に小麦の自由販売を認可した。これはソ連ホルホーズ農業の発展と増収に、何等かの関係があるような印象を吾々に与える。吾々はソ連民衆が今まで数々になめて来た苦労が、幾分でも緩和されて来た事を心から慶賀したい気分にも一寸なった。

処が、丁度この自由販売制が出来上る数年も前から、ソ連ホルホーズ農業に非常に奇異なる変異が序々に起り初めていたことが、最近極めてはっきりした形となって表面に現われて来た。それは、世界に誇ったソ連のホルホーズ農法が、漸次その規模を縮少し初め、例のギ

カンド（コルホーズの大きな物）などは完全にソ連から姿を消したものだ。この事実を本年三月二十四日号の「フリーダム紙」は取りあつかっている。以下は同紙に載ったエドワード・克蘭クショー氏の論文抄訳である。

「二千台のトラクターと一万台の連絡機（刈り取りと脱穀とを同時にやる機械―筆者）と同量の補助機を装備した十万人以上の機械化された群集が、党の指令一本で、ソ連内の既設の農場から穀物収穫のための斗争に従事するため、ヴォルガの草原地帯やウラル、シベリヤ、カザウクスタン等の処女地へ輸送された。今年の彼らの仕事は、来年の国内の食糧貯蔵のために、パン用穀物二千万トンを作る三千二百万エーカー（一エーカーは日本反四百）の処女地を開墾することである。これらの広大な未開墾地へ入る群集を支持するために、関係官庁の各部は、所謂、野外キャンプ用テントや台所や風呂場や共同食物店、給水場、映画、新聞、給油所などを構築することから初めねばならぬと訓令されている。

青年共産同盟は、自発的に十万人の機械師とトラクター運転士の分遣隊を、現存する農場から引っこ抜き、たらない処は壮丁でその穴うめをしなければならない。

あらゆる種類の技術家と農事専門家も、又要求されている。彼らに高い愛国的な身振りを行わしめることが、あらゆる企業の指導者の義務である。凡ての志願者は彼らが現在受取っていると同じ割合で三ヶ月分のボーナスを受ける筈である。彼らはこの愛国運動の水先案内者として称揚される。

荒々しい処女地の開拓と、穀物生産に関するこの実務的に公布された怖るべき運動の命令は、党の新しい法令の教書と呼ばれている。党の第一書記であり農業ボスのクルウシエフがこの発起者ということになっている。

この全作業はこれらの肥沃な草原の貯えを開発して、早急に収穫を取り出すように計画された仕事である。これは土地乾燥で終りを告げたアメリカが、中西部の開拓へと眼をむけた方法に於て少しの違いもない。ソ連では、仕事ごとにアメリカをけなしているが、アメリカ式方法を模倣している。

第一と第二の五ヶ年計画に於けるロシア農業の機械化は、すでに土地の浸蝕の諸方則に従って、小規模の農耕に置き換えられてしまった。現在、彼らが前述のような命令を出さざるを得ないのは、この傾向の激化の現われである。

アメリカ中西部の早期乾燥が、その目先きのなてとより早い土地からの作物収奪のために、資本主義的飢餓の避けがたい結果を受けていると同じく、ロシア政府もおっかぶさって来る必要を避けるために、これと同じ結果になる方法を採用せざるを得ないのである。」

克蘭クショー氏はここで「若しそうであるならばロシア政府は、その未来を犠牲にして、目先きの土地からの穀物収奪をねらっているのだ。彼らが現実の諸問題から身をかわすために、将来に禍根を残しているのを見れば、ロシア政府が表面に見える以上に、実にひどく苦しみがいていると推量しても差つかえはあるまい」といっている。

以上、克蘭クショー氏はこの論文の中で少しもヤロビ農法のことにはふれてはいないが、大規模な農業の機械化の中の一システムとしてヤロビ農法を考える場合は勿論、例え小規模な方法としても、現在の農業化学や土壌の科学的研究段階に於いてはヤロビ農法が無理に早急な土地からの穀物収奪のために、土地の早期の乾燥を助長し、土地の浸蝕を引き起こすことになって、結果に於いて人類の将来をかねて暗澹たるものにするのではないかと考えられる。尚、現在のソ連式農業政策を覗いていると、その形式の点に於ては、トラクターや連絡機で極度に近代化を強化し、設備をととのえ、やがてはアドリアン・バラックの建てこんだ俄か造りの村にまで、前述の新開墾地は発展して行くように見える。が、その外面的な壮観さは逆に、その土地からの早急な収奪の結果、やがてはその土地を廢墟に等しい物にして行く過程が見えすいている。それはスマトラや朝鮮の火田民が草原や森に火をつけ、肥料として、その土地から収獲出来る間だけ収穫し、土地が駄目になると又々外の土地へ火を付けに行くやり方と、実に奇妙な類似があるような気がする。この古代的な原始農法と、最も近代的だと称するロシア式農法との、奇異なる結果に於ける類似は、一体全体何に起因するのだろうか。

そして、曾っての古いロシア式農業を、世界の農業史上もっとも革命的だと誇示されたコルホーズ組織に切り換えるために、ロシアの農民諸君が払ったこれ又未會有の不幸と残酷

なる血の犠牲の結果が、若し克蘭クショー氏が言うが如く、コルホーズ組織を極度に縮小させる方向にあるとすれば、世にこれにもまさる喜劇は一寸考えることさえ出来ないように思われる。

ルイセンコの追放をめぐって

四月十日の朝日新聞はルイセンコ追放のニュース（モスクワ放送）をのせた。「朝日」の簡単な解説は、その読者にルイセンコニズムの没落ではなくて、単にソ連科学アカデミー総責任者たる彼が、その地位を失ったのみに過ぎないような印象を、しいて与えんとしている。即ち、それは、彼の学説の当否の問題ではなくて、所謂、政治的なルイセンコとその反対者ヴァヴィロフの派閥的な争いの結果から来る一勢力均衡上における一方の失望だと思わせようとしている。

ところが本当にこのニュースを裏づける事実はどうであろうか。吾々無政府主義者は、今迄何度もルイセンコニズムとそれのソ連農業に及ぼす現実的な影響について論じてきた。

勿論、ソ連でもスターリン死後、批判の自由が多少みとめられはじめた後、メンデリスムを死守して学界の主流から離脱せしめられたヴァヴィロフ一派から、ルイセンコニズムに対す

る批判はあった。しかし、それは多く、極めて専門的な遺伝学の分野や、実験的な領域に属していた。例えば抗生物質を変形させて、カビや菌類のように生活せしめうる、と主張するルイセンコ説を、全くナンセンスだと断定すると言ったていの物であった。そしてルイセンコニズムとソ連農業との関係を論じたものは、極めてまれであって、あっても、それは論者の主観が露出し過ぎていて、ソ連農業における質、量の低下を、一切、ルイセンコニズムの欠点とする傾向をとっていた。

われわれ無政府主義者はこの傾向に賛同しなかった。吾々は言った。

ソ連農業に低下と漸落傾向が現われたのは、化学肥料の濫用と責任の回避、及び土地に対する愛の喪失、即ち、大地は母であるという古来からのロシア農民の深き伝統的信念の無視からである。唯物弁証法に裏付けられた指導者共の独断的な観念が、これに拍車をかけたことはいままでもない。

かくして極端な土地からの作物収奪の結果、土地の初期乾燥にひきつづいて、宿命的な浸蝕がソ連農業地帯にはじまったのである。この事実は、アメリカ中部農業地帯でもかつて出現し、その地方を廃墟と化した歴史的事実が厳存するのであるが、技術的にいって農業革命の精華であると讃えられているソ連のコルホーズに、これが現われた事は、実に因果といわざるをえない。かくてソ連では、コルホーズの縮小傾向がつづいて起って来たのである。

このため起った農作物の必然的な漸減的傾向は、フルシチョフをして、政治的にはマレン

コフの総理免官を、技術的にはホルホース要員の減員を、余儀なくせしめねばならなかったかくして不足農作物の獲得のために、ほとんど狂的な未開墾地開拓にフルシチョフが突進しはじめたことは、吾々がアナーキズム誌でさきに指摘したごとくである。ルイセンコニズムの現象的な部分、即ち、「春化処理」（秋播き小麦を冷凍して春播けば多収穫をうる）は、この傾向助長の主役を演じたのではなく、単に馬の脚ほどの役廻りをしたに過ぎないのである。だが馬の脚だっていなくては、その芝居が芝居にならないこと及び、その芝居の責任があることは読者のよく御存知のことである。吾々は、去年、日本共産党員が農地委員の選挙の時に、ルイセンコの春化処理を、その宣伝に使っていた当時、すでにこのことは述べた。

ルイセンコ追放のニュースは以上の如く、外面的には彼の学説の当否の問題に端を発してその学説がその国の産業に悪結果を及ぼした結果を、ソ連の方法で処理したもの過ぎない。さらに内面的には、政治が、決して干渉してはならない芸術や科学に、強引に干渉した場合、当の科学や芸術が如何にひん曲った代物に成り下るかを、示す好適例である。政治屋共の最初の思い上った強引な干渉は、結果として、その国の政治及び政治屋自身の政治的生命の凋落となって、はね返ってくるのである。

スターリン死後、ソ連の科学者がメンチェスターの気象会議へ出かけたり、哲学者がチューリッヒの哲学者会議へ出席したりするようになったのも、外観上は科学や哲学の進歩のためと見る向きもあるが、実際は長い年月、他の世界から隔離せしめられたソ連の科学や哲学

のデッチ上げた独断的な教義や成果が、とるにたらないものであることと、その教義や成果の製作者達である、実際はとてつもない詐欺師どもに、荣誉ある地位を授けて来たことに、ソ連の指導者達が気付きはじめ、それをそのまま放置しておけば、ソ連政治及びソ連政治屋共の政治的生命の終末を意味することをさとしたからだともいえるのである。

おそらく、これがフルシチョフなどによって最近しきりに強調されているスターリンの個人崇拜排除の心理的意味である。ルイセンコはその出発の最初のコースに於いて、スターリンの政治的手段の素材にすぎなかった。今やフルシチョフ等の政治的生命の守護のため、墜落天使として地獄へ落ちて行くことだろう。

真の科学や哲学の発展は、個人的独裁であろうと、集団的独裁であろうと、少くとも独裁のある処では、その光輝を示しえない。それは討論の自由と、科学的な平等の基礎の上に立つ、新鮮な環境―即ちアナーキスチックな状況の中でのみ可能である。